

## 2026年2月1日 説教「主の御名によって来られる方に」

ルカの福音書 13章 31～35節

今朝の聖書箇所の前段落で、主イエスは神の国についてたとえ話で教えられました。そして、そこに入るには恩恵の門である狭い門から入りなさいと教えられました。その門は一見は入りにくくても、その向こうには主なる神の食卓にあずかる場所があると示され、「しんがりの者があとで先頭の者がしんがりになる」と結ばれたのでした。

### 1. ヘロデの脅し (31～32節)

- ①パリサイ人の脅し (31) 「**ちょうどそのとき、何人かのパリサイ人が近寄って来て、イエスに言った。『ここから出てほかの所へ行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうと思っています。』**

ちょうどそのようなことが話された時に、何人かのパリサイ人がイエスの所にやってきました。彼らは、ヘロデとつながっていて、その指示でやってきました。それは次の節を見れば明らかです。このヘロデはイエス誕生の時代のヘロデ大王の息子で、バプテスマのヨハネの首をとった、ヘロデ・アンティパスです(マタイ 14:1-12 参照)。そのパリサイ人達が言いました。「ヘロデの領地であるガリラヤ地域から出て、他の所に行きなさい。ヘロデはあなたの命をねらっている」。これは遠回しの脅しでありました。

- ②イエスの答え (32) 「**イエスは言われた。『行って、あの狐にこう言いなさい。『よく見なさい。わたしは、きょうと、あすとは、悪霊どもを追い出し、病人をいやし、三日目に、全うされます。』**

しかし、イエスはそんな脅しに乗ることはありません。そして、いわば使いのパリサイ人達に言いました。「あの狐」、すなわちヘロデ・アンティパスにこう言いなさいと。その内容は、「わたしは、今日と明日は悪霊を追い出し、病人を癒す、そして三日目に全うされる」というものでした。主は淡々と地上での働きをなさった後に、十字架の受難によって、その使命を全うされると言われているのです。ヘブル人への手紙2章10節に「神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされる」とあります。主イエスはヘロデの言葉によって動くのではなく、神の御心に従って十字架への道を進まんとしていることを述べられているのです。

### 2. エルサレムに向かうイエス (33～34節)

- ①エルサレムに行くしかない (33) 「**『だが、わたしは、きょうもあすも次の日も進んでいかなければなりません。なぜなら、預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありえないからです。』**

そして、はっきりと言われます。「わたしは、今日も明日も次の日も(エルサレムへの道を進みます)と言われ、その理由を「預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありえないからです」と言われたのです。エルサレムにはユダヤ教の神殿があり、そこでは旧約聖書にもあるように、祭司を通して、羊などの動物を捧げることに贖罪がなされていました。しかし、主イエスは、ご自身を犠牲としてささげるために、エルサレムに向かわんとしていたので

す。それも、ローマ帝国における極刑である十字架刑を受けることをご覚悟の上で、そこに進まんとしておられたのです。

- ②イスラエルの民を愛したのに (34) 「**ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。**」

イエスはエルサレムの国とその民に呼びかけているのです。その民はこれまで、神が遣わされた預言者たちを迫害してきたのです。たとえば、エリヤの時代にアハブとその妻イゼベルは「主の預言者たちを殺した」(I列王記18:4)にあります。新約時代にはバプテスマのヨハネがそうでした。イスラエルの民は石打ちで迫害したこともありましたが、なんということでしょう。主なる神はこの民を愛してこられたのに、その民のなしたことは逆でした。主イエスご自身もめんどりがそのひなをかばうように、さまざまな配慮をしてこられたと述べられています。ところが、その民は主に目を向けようとはしなかったのです。

### 3. 主イエスへの賛美 (35 節)

- ①荒れ果てたイスラエルの家 (35) 「**見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。**」

「あなたがたの家は荒れ果てる」とありますが、2017年度版などでは、「あなたがたの家は見捨てられる」とあります。つまりは、主のご忍耐によって守られてきた家、イスラエルは、その不信仰のゆえに、見捨てられて荒れ果ててしまうということです。自分たちがどれだけ、主の憐みによって生かされてきたかを知らずに、無視する民を戒められておられるのです。

- ②時が来るまで主を見ない (35) 「**わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません。**」

イエス・キリストは、「祝福あれ。主の御名によって来られた方に」という告白を民がなさねば、主イエスを見ることはできないと述べておられます。つまり、主なる神の名においてこられた御自身を正しく救い主と認めることを求められているのです。そうしないならば、イエス・キリストという方を正しく見ることができると言われるのです。何のことを言われているのでしょうか。この後のことですが、十字架を前にして主イエスはエルサレム入城されます。その時に、民は叫びました。「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に」(マタイ21:9)。確かにその叫びを主も喜ばれました。しかし、その時に彼らはイエスを正しく見たのでしょうか。どうも、まだ見ることはできないでいたというしかありません。なしろ、イエスが逮捕されると人々はむしろイエスをののしったのですから。それでは、これはどういう意味なのかといえ、35節の言葉はもっと先のこと、再臨の主のことを指していると考えて差し支えないと考えられます。

### 《展開と結論》

今朝は35節で考えたことを継続して考えていきましょう。

詩篇118篇26節に「主の御名によって来る人に、祝福があるように。私たちの主の家から、あなたがたを祝福した。」とあります。詩人は来たるべき方を待ち望んでいるのです。そして、その方が大いに祝福されるようにとうたっているのです。ところが、実際のところエルサレムの民の信仰は形骸化していました。彼らは神から遣わされた預言者たちを迫害し、神への信仰は隅に置かれ、ないがしろにされました。そんな中でも、主は神から離れる民のために預言者たちを派遣してくださったのです。彼らに耳を貸す時もありました。信仰深い王たちもいました。しかし、少しすると元の木阿弥でした。そんな彼らに対して、神であられる主イエスも、「わたしはめんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。」と言われたように、民に対する神の慈しみは、懇ろであり、忍耐に富んだものであったのです。民は、それでも神を受け入れようとしませんでした。

それではその不信仰は旧約の民あるいは、主イエスの時代の民だけなのでしょうか。言うまでもなく、そうではありません。信仰者である私たち自身も、主なる神様から目を離してしまやすい者達ではないでしょうか。聖歌521番の作者が「キリストには代えられません、世の宝もまた富も、このおかたがわたしに代わって死んだゆえです。」「キリストには代えられません。有名な人になることも。人のほめる言葉もこの心をひきません。」「キリストには代えられません。いかに美しいものも。このお方で、心の満たされてある今は」と歌っています。ミラーという作詞者もかつては、世の宝、名誉心、人からの評判、美しい装飾品などに心奪われやすかったのでしょうか。人はそれらを神としてしまうことがあります。いつの間にか、人と比べてしまうということも、神ではなく、この世のことを優先しているからです。私もこれらのことに惑わされやすいことを告白します。

主を主とすること。神を神とすること。それが私たちにはなかなかできません。しかし、主を主とするならば、もっと心安らかなのです。なぜなら、他の人ありかた、評判、などに左右されないからです。主を主とするならば、聖なる方の前で、自分の罪を告白します。そして、十字架の主のゆえに、赦しをいただいています。山を知るためには、まずは山を遠くから見てください。それだけではわからないので、実際その山に行くでしよう。近くで見ただけでなく、そこに登るでしよう。それでもわかったことにはなりません、大分山を知ることが出来ます。私たちも主を主とするためには、聖書を通して主学びましょう。そして、賛美し、祈ることを通して主と交わりましょう。さらに主への信仰をもって、何かを行っていきましょう。そうしていくときに主は私たちに具体的に臨んでくださるのです。そのようにして、私たちも「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」と、私たちを愛して下さっているイエス・キリストを告白し、主の恵みにあずかっていこうではありませんか。